

「話すこと」における言語運用能力の育成 —教科書を活用した解釈的活動を通して—

長期研究員 小澤 恵子

《研究の要旨》

コミュニケーション能力の育成には、言語知識を身に付けるだけでなく、それらを実際の場面で使いこなす言語運用能力を高める必要がある。本研究では、教科書を活用して自分の考えを話す「解釈的活動」を核に単元を構成することで、生徒の「話すこと」における言語運用能力を育成することができると考えた。本研究では、その考えに基づき、授業実践を通して、生徒の言語運用能力の向上をめざした。

I 研究の趣旨

英語科の目標はコミュニケーション能力の育成であり、自分の考えなどを表現できるようになることをめざしている。そのためには言語知識を身に付けるだけでなく、それらを実際に使いこなす力である言語運用能力を高めることが必要である。しかし、多くの授業では文法などの知識を学ぶ活動に多くの時間が費やされ、その知識を使用して自分の考えなどを話す活動はあまり行われていない傾向がある。また、多くの教師がその活動の必要性を感じながらも、指導が困難だと感じていることも明らかになっている。そこで、本研究では、「話すこと」における言語運用能力の育成をめざしたいと考えた。

そこで注目したのが、教科書の話題や情報について、自分の解釈（考え）を話す「解釈的活動^{※1}」である。教科書は幅広い内容を扱っているため、教師は様々な解釈的活動を設定できる。また、生徒は学習内容を活用して自分の考えを話せるので、活動に取り組みやすい。

言語運用では、自分の言語知識から必要なものを引き出し、それを使用して考えを言語化する処理が行われる。その処理は、話す活動を繰り返すことで能率が上がり、言語運用能力が向上する。そこで、解釈的活動を核に単元を構成することにより、言語知識を使用する機会が増え、「話すこと」における言語運用能力を育成できると考えた。

※1 Brown, R. (1991) Group work, task difference, and second language acquisition. *Applied Linguistics*, 12: 1-12.

II 研究の概要

1 研究仮説

教科書の話題や情報について自分の考えを話す解釈的活動を行うことで言語知識を使用する機会が増え、「話すこと」の言語運用能力を育成することができるであろう。

2 実態調査

研究協力校の1年生(119名)に、英語を話すことに関する意識調査を行った。96%の生徒が話す力を伸ばした

いと考えている一方、「自分の考えを話すことができる」と答えた生徒は19%であった。また、協力校の英語担当教師への聞き取り調査では、授業で新出単語の練習や文法解説、音読などの活動をよく行う一方、考えを英語で話す活動はあまり行っていないことが分かった。

3 研究の内容と実際

(1) 解釈的活動を核とした単元構成の工夫

授業実践では様々な場面で解釈的活動を設定し、生徒が既習知識を活用しながら自分の考えを話す活動を段階的に位置付けるよう工夫した。最初は語句や短い文で話す活動を積み重ね、単元の核となるパートやまとめでは、まとまった内容を話す活動を設定した。

① 授業実践 I (6~7月)

実践 I の単元は、手塚治虫の人生と進路についての高校生へのメッセージを扱っている。手塚の生き方や考え方を通して、自分の進路についての考えを発信することをねらいとし、図1のように解釈的活動を計画した。

Lesson 4 Tezuka Osamu: A Message for You (計6時間)	
時間	展開
1	単元の導入 ・自分の好きなマンガ家やアーティストについて会話を。 ・手塚治虫について知っていること(作品やその感想)を話す。
2	Part 1 (内容) 戦争と医学生として患者の死に立ち会った体験が作品に影響を与えた。 ・聞き取った語から二つの出来事について予測し、それについて話す。
3	Part 2-3 ・二つの出来事から、手塚が作品で描こうとしたテーマについて話す。 * 指導は研究協力校の教員が担当 (内容) 医学生の手塚は、あるきっかけでマンガ家をめざし、マンガに没頭する。
4	Part 4 (内容) 好きなことを続け、他のことも見つけて二つの職業選択肢をもつとよい。 ・将来の夢やその理由、そのために高校時代にしたいことについて話す。
5	Part 4 ・手塚のメッセージで心に残ったものとその理由について話す。
6	単元のまとめ ・マンガ家になりたいという夢を追うべきか、それとも母親の言う通りに、他の職業の選択肢を探すべきか悩む友人にアドバイスする。[発話録音]

図1 授業実践 I の解釈的活動

Part 4 の最初の活動では自分の進路について考えさせ、それを踏まえて、次の活動で手塚のメッセージを解釈させた。まとめの活動では、生徒が直面しがちな進路の悩みについて、前の活動で学んだ表現を役立てながら、友人へ助言させる活動を設定した。

② 授業実践 II (10月)

授業実践 II の単元は、脳が人間の視覚や感情に誤解を

与えるトリックについて考察する内容である。ここでは脳科学の知識を自分の生活や経験に当てはめて考え、それについて発信することをねらいとし、図2のように単元全体を通じて解釈的活動を展開した。

Lesson 7 Secrets of Our Brains (計10時間)		
時間	展開	解釈的活動
1	単元の導入	・教科書の絵やスライドのだまし絵を見て、自分に見えるものを説明する。 ・教科書の絵をヒントに、左脳と右脳の働きを予測し、それについて話す。
2	Part 1	(内容) 脳は相手の顔の右半分から、主として情報を得ている。
3		・教科書の合成写真とその反転写真が、男女どちらに見えるか話す。 ・学習した脳科学の知識が、生活のどんな場面に役に立つか考えて話す。
4		(内容) 顔の左半分だけが微笑んでいる「モナリザ」は謎めいた印象を与える。 ・「モナリザ」について知っていることや絵から受ける印象について話す。
5	Part 2	・「モナリザ」の秘密について学んだことを自分の考えを加えて説明する。
6		(内容) 脳の誤解を利用して好きな人に近づくことができる。
7		・好きな人に近づく方法の選択肢から効果的だと思う方法とその理由を話す。 ・恋愛における「つり橋効果」をどのような場面に応用できるか話す。
8	Part 4	(内容) 事実が感情と一致しないとき、脳は感情をだますことがある。
9		・「報酬が異なる退屈な仕事」実験の結果を予測し、理由について話す。
10	単元のまとめ	・友人をデートに誘いたいと思うALTIに、選択肢からおすすめのデートスポットを選び、教科書で学んだことを根拠にアドバイスする。[発話録音] (前時の活動の振り返り)

図2 授業実践Ⅱの解釈的活動

単元のまとめの活動は、Part 3の学習内容を活用できるよう設定した。Part 3の活動で、つり橋での心拍数の上昇が脳の誤解を引き起こす仕組みを別の場面に応用することで、まとめの活動で自分の考えとその根拠を説明しやすくさせた。

(2) 生徒の発話を促進する支援の工夫

生徒の発話に対する負荷を軽減するために図3のような支援を行い、生徒の発話を促進できるよう工夫した。

心理面	内容面	言語面
<話しやすい雰囲気を作る> ・考える時間の確保(メモ) ・ペア・グループ活動の工夫 ・肯定的コメント など	<話し内容を充実させる> ・スキーマの活性化 ・学習内容の可視化 ・資料の提供 など	<言いたいことを表現しやすくする> ・有用な語句や表現の提供 ・モデルの提供 ・振り返りの場の設定 など
ループリック評価		

図3 解釈的活動における支援

① 心理面での支援

生徒の不安を軽減するために、初めから英語で発話させるのではなく、考えをまとめて簡単なメモをとれるように、数分間の準備時間を与えた。しかし、制限時間の中で自分の考えを何とか言語化しようとする過程は言語運用能力の育成には不可欠であるため、ある程度の即興性を保つよう努めた。活動では、最初はペアで話し、次に交替したペアやグループで話してから、クラス全体で共有させた。その際、生徒の発話には肯定的なコメントを心がけ、英語で話しやすい雰囲気作りに努めた。

② 内容面での支援

まず、発話の前に生徒と会話しながら、話題に関する背景知識(スキーマ)を活性化させる活動を行った。また、発話に利用できる本文中の知識をキーワードとともに図示して学習内容を可視化することで、生徒が学習内

容を発話に利用できるようにした。さらには、補助資料を提供することで生徒が自分の考えをもちやすくなるよう工夫した。

③ 言語面での支援

活動の前には、発話に用いることのできる語句や表現、モデルを提示して、自分の考えを表現しやすくさせた。ただし、これらの言語材料は与えすぎないように留意し、活動の後で自分の発話を振り返らせることで、表現の補充や誤りの修正の機会がもてるようにした。

発話の振り返りについては、特にまとまりのある発話を行う活動において、考えを一度話ただけで活動を終えるのではなく、図4のような手順で発話を改善する機会を設けた。

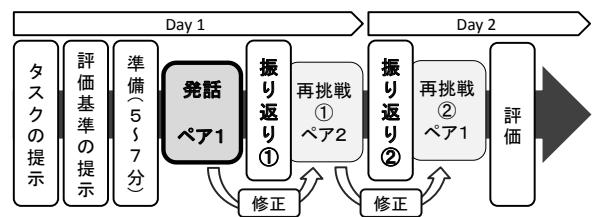


図4 振り返りを伴った解釈的活動の流れ

まず、ペアで考えをやりとりした後で、辞書や教科書を用いて自分の発話に内容を補充したり、誤りを修正したりして、自分の発話を改善する(振り返り①)。その後ペアを交替し2回目の発話を行い、プリントに活動の評価やうまく言えなかった表現等を記入する。教師はプリントや生徒が発話を書き起こしたものを確認し、次時の授業で生徒に文法の誤りや表現などについてフィードバックを与える。生徒は、それを基に再度発話を修正し(振り返り②)、最初のペアで3回目の発話を行う。このように、2回の振り返りを通して、発話の改善をめざした。

④ ループリック評価

ループリックは、学習活動の到達度を示す評価基準を観点と尺度からなる表で示したものである。実践では、いくつかの観点について、4段階の尺度とそれぞれについての記述文を提示した。観点は、活動の達成度(考えをどれだけ話せたか)、発話の内容(主張や理由等の有無)、発話の質(流暢さや正確さ)などを設定した。活動の目標を明確にすることで発話への意欲を高め、発話の内容や質にも注意を向けさせることで、発話の促進を図った。

4 言語運用能力の検証

(1) 検証方法

生徒の発話の変容を検証するため、実践Ⅰと実践Ⅱの単元のまとめの解釈的活動について、40名(男子19名、女子21名)の発話をICレコーダーに録音し、その発話データを分析した。なお、言語運用能力の変容を検証す

るには、異なる活動での即興に近い発話を比較する必要があると考え、活動における最初の発話を分析した。

検証方法としては「流暢さ」「正確さ」「複雑さ」の観点から分析した。具体的な検証項目はEllis & Barkhuizen (2005)を参考に図5のように設定した。また、参考資料として意識調査や生徒のワークシートを用いた。

検証の観点	検証項目	測定方法
Fluency (流暢さ)	①発話速度	1分間に発話した音節数
	②沈黙の長さ	発話中の1秒以上の沈黙時間の割合
Accuracy (正確さ)	③誤りの数	100語あたりの文法や発音の誤りの数
	④誤りの少なさ	誤りのないASユニット ^{※2} の割合
Complexity (複雑さ)	⑤内容の複雑さ	ASユニット数(述べた考えの数)
	⑥文法の複雑さ	ASユニット中の従属節の割合

図5 言語運用能力の検証方法

※2 The Analysis of Speech Unitの略で話し言葉の分析単位

(2) 検証結果

実践Iと実践IIのまとめの解釈的活動での発話を分析、比較した結果が図6である。実践Iと実践IIとの間で平均値の

検証の観点	単位	実践I	実践II
Fluency (流暢さ)	①発話速度	94.6	89.5
	②沈黙の長さ	22.2	17.5
Accuracy (正確さ)	③誤りの数	15.5	16.1
	④誤りの少なさ	44.9	43.7
Complexity (複雑さ)	⑤内容の複雑さ	2.93	4.75
	⑥文法の複雑さ	1.49	1.49

図6 言語運用能力の変容

差に関するt検定を行った結果、統計的に有意な差が認められたのは、⑤内容の複雑さであり、それ以外の項目については有意差が認められなかった。

5 考察

検証結果では「内容の複雑さ」で大きな増加が認められ、これは実践を通じて生徒がより多くの内容を発話できるようになったことを示している。その変容を示す、生徒の発話の一例が図7である。

<p><実践I> (1) I think you should think enough. (2) You mother idea is true. (3) But you have dream. (4) I think you will find answer after thinking. Good luck.</p> <p><実践II> (1) I think plan B is good. (2) Because paragliding ... is start high place. (3) So, she will be fear, feel fear. (4) Her heart will beat wildly because of fear, (5) but her brain misunderstand. (6) Her, she thinks her heart is racing because you're attractive. Good luck. *録音した発話を書き起こしたものをそのまま記載。数字はASユニットのカウントを表す。</p>

図7 生徒Aの発話の変容

変容の原因は、自分の考えを言語化する処理能力の向上にあると考えられる。解釈的活動を継続したことで、生徒が自分の言語知識を使用して、考えを言語化する処理が繰り返された。その結果、処理の能率が上がり、自分の伝えたい内容をより多くの言葉で話せるようになったと考えられる。

また、発話の内容に着目すると、実践IIでは、より多

くの生徒が単元で学んだ知識や表現を発話に生かして自分の考えを話したことが認められた。これは、解釈的活動の設定の工夫や、学習内容の可視化などの支援を通じて、生徒が学習した知識を解釈することに慣れ、発話内容の充実を手助けしたことを示唆している。

しかし一方で、検証結果では「内容の複雑さ」以外の項目で有意差は認められず、実践を通して、発話の「流暢さ」や「正確さ」、「文法の複雑さ」を高めることはできなかった。これについては、実践IIで行った振り返りを今後も継続することが有効だと考えられる。振り返りでの生徒の気づきや学びが次の授業場面での発話に生かされることで、言語運用能力の育成へとつなげたい。

6 結論

本研究では、これまで自分の考えを英語で話す機会があまりなかった生徒たちが、解釈的活動を繰り返すことで、より多くの内容を発話できるようになった点においては言語運用能力の向上が認められた。しかし、「流暢さ」や「正確さ」等も含めてバランスよく言語運用能力を育成するには、今後も系統的・継続的な指導が必要である。

III 研究のまとめ

1 研究の成果

授業実践を通じて、生徒の英語を話すことへの意識にも変容が見られた。アンケート結果では「自分の考えを英語で話すことができる」と答えた生徒が19%から69%に増加し、多くの生徒が考えを話すことへの自信を深めた様子が見られた。また、「コミュニケーション活動に積極的に取り組めた」と記述回答した生徒が多かった。このような態度は言語運用能力育成に不可欠であり、今後も生徒が意欲的に参加できる解釈的活動を工夫したい。

2 今後の課題

系統的に「話すこと」の指導を行うには、3年間を見通して「話すこと」の指導計画を作成し、それに基づいて、各単元で解釈的活動を展開する必要がある。多岐にわたる内容について、活動を設定するには工夫が必要であるが、いかに生徒の興味・関心を喚起しながら、考えを引き出すかという視点が教材研究に求められる。

また、発話を促進する支援として、自発的な気づきを促すことのできる振り返りの形態や、活動に応じて評価の観点を精選したルーブリックの在り方について研究を深め、より効果的な支援を行いたい。

今後も支援の在り方を工夫しながら、解釈的活動を核として単元の指導を継続し、最終的には、生徒が自分の考えについて、即興で自信をもって表現できるようになることを目標に、言語運用能力の向上をめざしたい。